

杉本苑子

鳥影の関

(上)





中公文庫

とりかげ せき
鳥影の関 (上)

定価はカバーに表示してあります。

1986年 4月10日初版
1997年 5月20日 4版

著者 すぎもと そのこ
杉本苑子

発行者 嶋中鵬二

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1986 CHUOKORON-SHA, INC. / Sonoko Sugimoto

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-201313-5 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

鳥 影 の 関

上 巻

杉 本 苑 子 著



中央公論社

上卷 目次

湯けむり	7
今日降る雪	60
東光庵浅春	117
緋ざくら	178
花ごろも	219
新樹	273
夏富士	335

鳥影の関

上卷

湯けむり

秋あき開けると、目に見えて霧が深くなる。芦ノ湖から湧き出すそれは、湖面じたいを覆いつくすばかりでなく、まわりの山や、岸辺の人家までを、白い、軽やかな紗幕しやまくの底にすっぽり包みこんだ。

そんな日は、一日じゅう日がささず、霧は霽はれないまま夕ぐれを迎える。

「風流な眺めだなどよろこんではおれぬなあ、こう、うっとろしい日ばかりつづいては……」
夫の唧ささち顔を、いまでも時おり小静は思い起こすことがある。

「洗せんい物は乾かぬ。家の中は湿る。歌も俳諧はいかいも案じ出すところではないよ」
取りなして、かならずそんなとき小静は夫に言ったものだ。

「そのかわりすつきり青空がひろがった日の気持のよさは、かくべつでございます。いながらに富士は見えるし紅葉もみぢはあざやかだし……。山住みなればこそ味わえる楽しみですまいか」

「それはそうだ。ま、そう思って我慢するのだな」
笑い合った相手は、もうこの世にいない。去年、秋のはじめに風邪をこじらせて、あっけなく

天野民部は亡くなったのだ。

当座、小静は氣抜けした。いきなり緊張がほぐれ、身体が宙に浮き上つてでもゆくような甘悲しい放心に捉われた。

（よかった。ともあれ無事に夫を畳の上で死なせることができて……）

まかりまちがえば刃を浴びて、民部は命を落とすことになったかも知れないのである。もと出羽米沢の藩士だった彼は、ささいな意見のくいちがいから同僚を斬り、主家を出奔してここ、元箱根の権現領に潜んだ。いわゆる仇持ちの身になったのであった。

「いま思い返せば、若氣のあやまち……。つくづく短慮が悔やまれる。いさぎよく名乗り出て遺族に討たれてやってもよい」

弱氣になる民部を妻の小静が懸命にはげまし、十数年ものあいだ、ともかくも隠れ通すことができたのは、ひとり娘の小光に歎きを見せたくない一心からだつた。

四年前、その小光は塔ノ沢の湯宿にとつぎ、民部も尋常に病歿して、このほど一周忌の法要をすませた。湖畔の借家に、小静は独り取り残されたのである。

まるで、それを待ってでもいたように、

「ご在宅かな？」

訪ねてきた男がいる。

「わしじゃよ。塚本倉三でござる」

箱根関所に勤務する初老の定番人であった。

「じつは小静どの、おりいってそなたにたのみがある。聞いてくれまいか」

この朝も霧が濃く、塚本の髪にも肩にもこまかな水滴が銀砂を吹きつけたように燦いていた。

「これは塚本さま、改まって何ご用でござりましょう」

「ほかでもない、そなた、箱根のお関所^{ひとみかん}に人見女として出仕する気はないかな」

「わたくしが人見女に？」

小静は目をみはった。

着痩せするたちなのか、肉付きはけっして悪くないのに、^{しな}撓いそうに肩先が薄い。剃り落とした眉の青さが色じろな肌をいっそう肌理こまかく見せている。紅もささない。それでいて唇は、ほんのりといつも赤く、お齒黒の艶がなまめかしかった。

四十二という実際の年よりも五つ六つ若く見える小静が、夫に死に別れて一年になる今日まで、浮いた噂ひとつ立てられず、それどころか、いまなお、

「天野先生のご新造さん」

と呼ばれて町民に敬愛されているのは、天性、身に備わった気品ばかりでなく、内部から彼女を支える一種の気迫が、立ち居や言葉のはしほしに自然と^{にじ}滲み出るからであった。仇持ちの夫に添って、探索者の目から絶えずその安全を守ろうとした日々……。いわば張りつめて生きた歳月が、小静を研いたといえるだろう。

げんに塚本倉三も、

「どうぞ、おあがりくださいませ」

座敷へ招じ入れようとする小静に、手を振って、

「いやいや、美しい後家どのの一人住まいにのこのこあがりこんで、あらぬ風評など立てられては、みどもはよくてもそちらに迷惑。ここで結構じゃ」

縁先に腰をおろして話しはじめた。

「知つての通り、人見女の定員は三人が決まりじゃが経費節約のご趣旨もあり、ここ十年近く一人欠けたまま補充もせずに、二人のみで勤めておった。ところが、小静どの。うちの一人が脚氣を病んでこのほど退職してな、石川の女房だけになってしもうたのじゃ」

「お徳さまでござりまするか」

「うん、あの婆さま一人では、万一、寝込まれでもしたとき法返しがつかぬ。口ばかりは達者だが、六十なかばの年寄りじゃでな。これまた、いつ何どき煩いつくか、油断はならぬのじゃ」

そこで定番人が鳩首協議して、そなたに白羽の矢を立てたのじゃと聞かされても、小静は途方にくれるばかりであつた。

箱根関所は、つい目と鼻の先にある。しかし小静はまだ一度も、関所を通過して三島側へくだつて行つた体験を持たない。

関所のすぐ向こうに拡がる箱根宿——。家かず二百軒を越すにぎやかな宿駅の灯を、隣り町でいながらいまだかつて、かいま見たことさえないのである。

小静一人に限らない。そんな女は、元箱根にたくさんいたし、おそらく箱根宿にも、関のこちら側を一生涯、覗いたことのない女が無数にいるはずであつた。

関所とは、つまり、そこを通過する旅人にとって面倒な存在であつたばかりでなく、関を挟んで東西にひらけた二つの町の住民にも、おたがいの行き来をはばむ厄介なじゃまものだったわけである。

関の西側の箱根宿。

関の東にある元箱根。

芦ノ湖の水は双方の岸を、同じように洗っているし、大声で呼び合えば聞こえそうなほど両町

の距離は近いのに、人々は自由な交際すらままならない。

こんな話を小静も聞いたことがある。箱根宿に住む小間物屋の主人が、のっぴきならない用ができたため手形を申請し、関所役人の検問を受けて元箱根へやって来た。ところが用事をすませていざ、帰ろうとするまぎわに、急病にかかって頓死してしまったのである。

さあ、大変だ。手形の文面は、生き身の小間物屋一人の通行を認めているけれども、『死骸』となった彼を通すときまでは書いてない。それでなくても死体の通過、首級の持ち運びなどにはしちむずかしい調べや手続きが要る。

暑いさかりではあり、ぐずぐず日数をかけてはいられなかった。仕方がない。小間物屋の亡きがらは、先祖代々の菩提寺が箱根町にありながら縁もゆかりもない元箱根に埋葬しなければならなくなった。

隣り近所、親類が集まっつての葬式も出せぬまま、他町に住む他人の手だけでひっそり葬むられたと聞いて、

「ご当人はもとより、家族もさぞ心残りだったでしょうなあ」

小静はそぞろ、同情したのをおぼえている。

うっかり恋など語れないし、嫁取りや婿取りも禁物だった。孫が生まれた、やれ宮参りだ、盆暮れの届け物だといっても、姻戚同士おそれとは行ったり来たりができない。いちいちそのたびに関手形を貰わねばならぬ煩雑さに、だれしもが二の足を踏んだ。

心ならずも、だから両町の住民のつき合いは疎くならざるをえなかった。

箱根関所によって、おたがいの交流がぶつ切り断ち切られているために、関の東に位置する元箱根の人たちは、いきおい小田原や江戸の動静に関心を示す率が高くなり、あべこべに西側に住

む箱根宿のひとびとは三島から駿府、名古屋、さらにその先につらなる京、大坂の空に、視線を放つ機会が多くなった。

東海道という一線上に並びながら、接点に関所が設けられた結果、二つの町は背中合せのよそよそしさを余儀なくされ、町民たちの生活意識までが、いささか大げさにいえば元箱根は東国文化圏、箱根宿は上方指向の西国文化圏に、すっぱり、分断されてしまったともいえるのである。女性の通行は、特にきびしく見張られていた。中でも『出女』の監視が、箱根関所の重大な任務だった。東から西へ——つまり江戸を出て上方のぼりする女たちに、関役人はことさらに目を光らせるのである。

塚本倉三が口にした人見女なる役職は、いってみればこの『出女』に対する身体検査役なのであった。

「とても、わたくしなどに勤まる仕事とは思えません……」

尻ごみする小静へ、

「なあに、懸念にはおよばぬよ」

こともなげに塚本は手を振ってみせた。

「役目じたいは、すこしもむずかしいものではない。なにせあの、石川のおしゃべり婆にさえ勤まるお役じゃでな」

と、前歯の欠けた洞抜け声で笑う。少々、小狡いと評判されている定番人だが人当りは柔かな男なのである。

「つづめて申さば、しんじつ女か否か、確かめてさえくれればよいのじゃ。女が男に化けて関を通ろうとするときがある。男が女装して旅する場合もあるでな」

厄介なのは、乳にまだ、ふくらみがきざさぬ少女だ。小姓や若衆などにこれを変装させると、なかなか外からでは見破れない。

「でも、そこが永年の勘というやつでな、胡乱な相手はすぐ、わかる。わかるけれども、まさかわれわれ男の関役人が、湯具を取れの胸をあけるのとは言いにくい。そこで人見女にご登場ねがうというわけじゃ」

手形に記載された人物が、はたして本物の当人かどうか、その確認も人見女の仕事にはいる。「たとえば、臍のわきに黒子が二つある、と書かれておたらば、着物をぬがせて見ねばならぬし、脳天に差し渡し一寸ほどの禿ありと書かれておれば、髪をほどかせて調べねばならぬ。女相手ゆえ、女ならでは勤めかねる役儀なのじゃよ」

小静は溜め息をついた。たやすげに塚本は言うが、どうやら思いのほか、氣骨の折れる仕事らしい。

「高貴の女性にも、ときには接する折りがあるのでござりませぬか？」

「それぞれ、そこじゃよ」

わが意を得た、と言いたげな顔で塚本倉三はうなずいてみせた。

「わしらがな小静さん、そなたに白羽の矢を立てたのも、そのへんを勘考したからじゃ。箱根関所が設けられたそもそもから、人見女には身許の不たしかな者は取らなんだ。百姓の出であつても関所周辺の守り村の、村役ぐらゐは勤める家の女房やおふくろなどが代々依頼される慣しであつた。お徳婆も、箱根宿の脇本陣、石川家の後家どのじゃで氣位はいっぱし高いが、学問の素養で申さば仮名のにじり書きがやと……。貴人との太刀打ちは荷が重いのじゃ」

と塚本はこきおろすのだ。

「そこへゆくと小静どのは、筆跡がみごと。読み書きも達者。和歌の一首や二首、苦もなく詠む。さすが天野先生のおつれ合いじゃと定番人一同、かねがね感服しておりますのじゃ」

小静は恥じて、耳たぶを赧くした。

先生などと呼ばれてはいたが、亡夫は寺子屋の師匠だし、小静の教養とて侍の女房ならだれもが一通りは身につけているであろうごく当り前なものにすぎない。それでも、

「お徳婆あたりとくらべたら月とすっぽんよ」

塚本は持ちあげる。

「御所づとめの上臈衆、大奥や諸侯に仕える女中衆など、したたかな女どもと渡り合うても、小静どのならば怯みはすまい。同じ旅びとなのに、お徳は下々の女と見れば横風な顔でおどしつけ、身分の高い相手にはべこべこしくさる。どうやらこっそり、袖の下なども取り込んでおる気配なのじゃ」

「袖の下を？」

「ここだけの話じゃよ小静どの、他言はしてくださるな。手証を掴んだわけではござらぬからな」

「心得ております」

「ともかく、現在ただ一人いる人見女の勤めぶりをそれとなく牽制するためにも、早急に欠員を補充せねばならぬ。まげてご承引ただけまいかな」

腰のたばこ入れを抜き出して一服うまそうに吸いつけながら塚本はつぶけた。

「と言うても、肝心のことを申さいでは思案がつくまい。二人扶持、銀子一枚のお役料のほか、出勤のお手当として一日につき米四合の支給がある。むろん毎日顔を見せずともよいのじゃ。調

べの必要が生じたさい、足輕を迎えに寄こすゆえ関所に出てきてほしいのじゃよ」

六人いる定番人の待遇もけっしてよいとはいえない。年に七石たらずの薄給だから、それだけでは到底、家族を養ってはいけないのだと塚本はこぼした。

「老妻に茶屋などやらせているのも扶持米だけではくらせぬからじゃが、人見女も定番人も、身分で申さばれつきとした公儀役人なのじゃぞ小静どの」

「お手当を、小田原藩からいただくわけではありませぬので？」

「いや、銀子も扶持米も、小田原藩から出る。藩の分限帳にも土分と足輕の間にお関所定番人、人見女は載せられておるのじゃから、その意味からすれば小田原藩士に準ずるけれども、たとえば藩主の大久保家がどこぞ他国へ転封になり、番頭ばんがしらはじめ、これまで関所役人を勤めてきた藩士らが殿さまに従ってよそへ去っても、われらは動かぬ。『貰い受け役人』と言うてな、旧領主から新領主へ引き継がれ、そのまま関守りをつづけるのじゃよ」

塚本倉三が強調したがつているのは、『貰い受け役人』の立場の特殊性だった。

東海道に箱根関所が置かれた当初から、地元採用の定番人は、ほとんどが世襲のかたちで関の実務にたずさわってきた。

公儀は管理を、小田原藩にまかせている。関所に詰める侍たちも小田原から出張してくる藩士だし、江戸開府このかた三度ほど、小田原藩主は入れ替った。

はじめ、大久保氏、ついで稲葉氏、そしてふたたび大久保氏が入国し、現在に至っている。

でも、定番人ばかりは変らない。大久保家から稲葉家へ、さらにまた大久保家へと受け継がれて、代々、関所と共に在りつづけた一仕事からすれば、関所が公儀のものであると同様、彼らも公儀直属のお役人ということになる。